

モンゴル語聖書翻訳史における「コンテキスト」の問題

長崎大学 滝澤克彦

中国語聖書における神の訳語論争を題材に翻訳の問題を論じた柳父章は、その論争をめぐる二つの立場を、コンテキスト重視とテキスト重視の対比として描き出した。この「コンテキスト」を、特定の「テキスト」に意味や価値を成り立たせる一連の体系あるいは枠組みと捉えるならば、それは言語のみならず文化一般に関わる問題である（柳父自身もその観点で論じている）。実際に、特定の文化における「コンテキスト」の意義は、近年の宣教をめぐる議論（文脈化神学）で非常に重視されている。そこでは、唯一の神の言葉を異なるコンテキストのなかでいかに具現化するかが、脱ヨーロッパ中心主義的傾向のなかで論じられてきた。しかし一方で、このようなコンテキストは、他のコンテキストと対比され、生み出されていくものである。それによって「文化」自体がテキスト化され、その意味はしばしば異なるコンテキストへ翻訳不可能なものとなる。つまり、コンテキスト化というプロセスは、唯一のものとしての聖書の絶対性と常に緊張関係にある。

本発表は、そのような緊張関係をモンゴル語聖書翻訳史のなかに読み解いていこうとするものである。例えば、モンゴル語聖書翻訳について、牧畜文化を通じた古代ユダヤとモンゴルの類似性が強調されることがある。例えば、家畜についての知識や感覚の同一性が、他の言語では失われるテキストのニュアンスをモンゴル語において再現可能にしているなどである。このような理解は、コンテキストの越境と切断という二つの矛盾する意志を同居させつつ、一つのコンテキストを生産している。翻訳という作業は、多かれ少なかれこのような葛藤をともなっているとと言えるだろう。ここでは、モンゴル語聖書翻訳の諸段階で、訳語や文体の選択を通してコンテキストとしての「(民族)文化」がいかに意識され、形成されてきたのか、その一端を考察すると同時に、モンゴル文学研究に関わる一つの問題として提起したい。